
キミとボクの壊れたセカイ 序章

篠崎麻琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミとボクの壊れたセカイ 序章

【Nコード】

N0402V

【作者名】

篠崎麻琴

【あらすじ】

中学2年の時に書いた原稿が発見されたので、ちょっと加筆・修正しての投稿です。目の目を見ないのかわいいそうだもんね。このころは、やたら残酷でグロテスクなものばっか書いてた頃なので、今読み返してもそれなりの迫力はあるなあと。

タイトルに「序章」とありますが、ええそうです、この夏、この続きを書き上げたいと思っています。

絞める、という行為は、大変に面倒臭い。

第一に、強い力が必要なこと。

第二に、場合によっては紐がいること。

第三に、相手を見付けるのが面倒なこと。

それでも私は、絞めたくて、絞められたかった。

初めて私が人形の首を絞めたのは、幼稚園年中の頃だったと記憶しているが、もしかするとそれより前だったかも知れない。なにぶん茫漠とした幼年期を過していたものだから記憶が曖昧だが、しかし私が初めて首を絞めたその人形ははつきりと記憶している。赤い服の、赤ん坊の人形であった。

私はその首を、よく意味も無く絞めつけていた。一回が五分程度であつたろうか、その首がふるふると震え、潰れていくさまを見ているのは、はつきり言つて楽しかった。

初めて私が動物の首を絞めたのはその翌年、絞めたものは、幼稚園で飼つていた兎だった。

その日の兎の餌遣り当番だった私が、一人で（本来は二人なのだが、もう一人は休みだった）兎小屋へ行き、足許に群がる兎の一羽一羽に人參を渡し、水を入れた器を地面に置き、小屋を去ろうとしたその時、ある衝動が私の頭を過つた。

絞めてみたい。

私はその感情を振り切り、一度は小屋を出ようとした、が。

絞めてみたい。

その感情はいつしかとめどなく溢れ出し、私を呑み込んだ。

水の入った器に群がる幾多もの兎の中から、私は一羽、兎を抱き取り、

私の顔の真正面に掲げ、

その眼を見つめた。

黒く、大きく、円らな瞳。

純粹に、ただ現在^{イマ}だけを見てる瞳。

これから、私に何をされるかも知らず、

ただ周囲に、愛嬌を振りまくだけ。

可愛い。

可愛いからこそ。

絞めてみたい。

ふっ、と肩に力を込める。

兎はやつと、異変に気付く。

一瞬、兎が驚いたような表情を見せた。

刹那、

絞めた。

兎の体が一瞬びくりと痙攣し、咽喉から声にならない悲鳴が迸った。

しかし私は、なおも絞めた。

兎は、逃げようと必死にもがく。

私は、それをねじ伏せる。

しかし、当時やつと身長が百センチを超えたかどうかという程度の体格であった私は、最終的には兎の抵抗に負け、兎を取り落とすた。

兎はまさしく脱兎となり、餌を食む群れの中に消えた。

直後、先生が私を呼びに来て、私は小屋を立ち去った。

その後、ある一羽の兎が絶対に私に寄り付かなくなったことは、言うまでも無いだろう。

初めて人間の首を絞めたのは更にその翌年、当時一歳だった妹の首であった。

丁度親が留守中で、家に私と妹しか存在しない状況の中、私はそれを実行した。

まだ幼い妹の、やわらかな首に私の指が食い込んでいく感触を、私は今でも憶えている。指の離れた妹の首には、私の指の跡が、薄く朱を差した様に残っていた。

初めて動物を絞め殺したのは、中学二年の春先のこと、部活帰りに道端で見つけた、弱った猫だった。

車に撥ねられたのであろうその猫は、誰の目にも手遅れとわかる息をしながら、道端に倒れていた。それでも猫は肋骨が折れんばかりに呼吸し、必死に生きようとしていたのだった。

私はそれ長いこと見ていたが、ある時それを、自分の腕に抱き取った。

多分その時、私の中ではこの猫をどうするのか、結論が出ていたのだと思う。

その証拠に。

私はその猫を抱き取った直後、

何の躊躇も無く、その首を絞めていた。

驚いた猫は最後の力を振り絞り、私に全力で抗った。

しかし、弱りきった猫が中学生の力に対抗できる訳も無く、段々と猫は抵抗する力を失っていった。

私は一段と強く腕に力を込めた。猫はまた痙攣し、抗うが、そんなに長く保つ訳が無い。

そして、三度目。

「

ッ！」

声ではない何か猫の咽喉から漏れ、そして猫は抵抗を止めた。だらりと私の手から垂れ下がったそれは、動く気配を全く見せない。

死んだ。

殺した。私が。

その感覚に、私は酔った。

私の手の中で、その手によって命を奪われた猫。

どうせ私が殺さなくとも、じきに死んだであろう命。

ついさっきまで、生きていた猫。

私と同じ命を持っていた猫。

同じ命に奪われた命。

その命の軽さに、私は戸惑い、混乱し、酔いしれ、そして

ふと、全力でその猫を絞めた。

胴体ごと、頭も。

あらぬ方向に曲がった骨がぎりぎりと言を立て、それ以上に曲がらんとばかりに抵抗するが、今の私を相手にして、それは全く無意味であった。

そして、

ばん。

まず、背骨が破断した。

ばん。ばぎゃん。

続いて、前後の脚の骨が壊れる。

そしてそのままその体が、まるで小麦粉を水で溶いたみたいにくちやくちやになっていく。

そしてそれが、原型を完全に失った頃、私は手を止め、自分の手をふと見つめた。

血、血、血。おびただしい量のヘモグロビン溶液。それから溢れ出す緋色の液体。そしてその液体は、私の指を伝い、掌を伝い、腕を伝い、そして

家に帰り、シャワーを浴びた。

やわらかな蒸気の中を、猫の血が流れていく。

それと一緒に、私の罪も流されていくように。

不意に、口許が歪んだのを憶えている

序 / 01 : 了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0402v/>

キミとボクの壊れたセカイ 序章

2011年8月12日22時53分発行